

少子高齢・人口減少社会を支える子を育む相互的な学習の時間の課題と可能性Ⅳ

— 静岡県富士宮市立貴船小学校の実践を手がかりに —

馬居 政幸^A、田宮 縁^A、○米津 英郎^B、新村 弘道^C、渡部 和則^D
静岡大学^A、静岡県富士宮市立内房小学校^B、静岡県焼津市市立黒石小学校^C
秋田県秋田市立高清水小学校^D

1 研究の目的

少子高齢化の進行による人口減少社会に生きることを余儀なくされる現在の子どもたちに必要な資質を育む総合的な学習の時間の課題と可能性を明らかにする。

2 研究発表の内容

本研究において我々は、これまで研究大会で総合的な学習の時間の実践に内在する問題点を整理し、子どもたちが生活者となって生きていく少子高齢・人口減少社会が進行する社会の特徴と課題、並びにその課題を解決するうえで必要となる資質はどんなものなのか提案してきた。

本発表では、これまでの研究成果を受けて取り組んだ平成24年度の静岡で米津が行ったキャリア教育の授業実践に基づき、少子高齢・人口減少社会を生きていくことを余儀なくされる子どもたちに総合的な学習の時間を通して身に付くようにしていかなければならない資質とさらに、キャリア教育の課題についても提案する。その上で、これからの総合的な学習の時間の課題と可能性を示す。

3 研究対象の授業概要

分析対象の実践は、米津が平成24年度に担任した第6学年で取り組んだ「貴船から学わたしたちの生き方 — 一人のために働く —」である。

月曜日の早朝、学校の周りのゴミ拾いをしている大人の存在に興味をもった子どもたちは、聞き取り調査を始めた。すると、学校の近くにある清掃業者がゴミ拾いをしていることが分かった。そして、子どもたちは、「どうして大人は働くのだろう」「働くとはどういうことだろう」という思いを強くもつようになった。

次に、子どもたちは、親の職業の仕事内容やなりたい職業について調べた。その活動の中で、資格や免許が必要な職業があることやお年寄りが元気に働いている仕事があることが分かった。

そして、商店街や幼稚園などで職業体験を行った。お客さんのことを考えて暖簾を作っている職人さんや笑顔で園児に接している保育士さん、親切に接客しているお年寄りの姿から、「働くとは相手のことを考えて行うことである」と、子どもたちは感じ取った。

さらに、人口統計グラフの変化から、自分たちが生活者となって働いていく社会が、少子高齢・人口減少社会であることを読み取った。

4 成果と課題

本実践を通して、働くことについての認識を深め高齢者と触れ合ったり、少子高齢・人口減少社会を生きていくことを理解したりすることはできた。しかし、自分が大人になったとき、どんな生き方をしていくのかといったキャリア教育の視点で深く考えることはできなかった。

本実践を見直し、社会全体で子どもを育て高齢者を支えていくためにはどのような資質が必要なのか、その資質を育むためにはどんな総合的な学習を行えばよいのか提案する。